特集 地域×に生きる で活きる

学校を取り巻く問題は複雑化・困難化し、今や学校だけでは対応が厳しい現状があり、学校と地域がパートナーとして連携・協働し、組織的・継続的な仕組みを整備していくことが必要不可欠となっています。そのような背景から、幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支える活動である「地域学校協働活動」に取り組んでいます。その活動の一つが「まくらざき学校応援団」のボランティア活動です。

今回の特集では、まくらざき学校応援団として地域で活躍する皆さんを紹介します。

「地域学校協働活動」と「まくらざき学校応援団」

「地域学校協働活動」とは、地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、**地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行うさまざまな活動**です。

その活動団体の一つが「まくらざき学校応援団」であり、学校における学習活動、安心・安全確保、環境整備などについてボランティアとして協力・支援を行う保護者・地域住民による活動組織です。本市では、4月1日現在で個人で24名、企業・団体で1264名の合計1288名が登録しています。

これまで本市では、地区公民館を中心とした校区ごとの活動が行われてきましたが、令和2年度から**市全体で総合化・ネットワーク化**し、より幅広い地域住民等の参画を推進し、それぞれの経験や知見を尊重し合いながら組織的で安定的に活動を継続できるような仕組みを整えるように取り組んでいます。

子どもたちの生きる力を育む学校応援団の活動

学校応援団をはじめとした地域学校協働活動は、子どもたちの生きる力を育ててくれます。

例えば、多くの幅広い方との関わりの中で、社会性やコミュニケーション能力が育まれることや、関わりの中で、褒めてもらったり認めてもらったりする経験が、自己肯定感や学習意欲を向上させることが期待されています。また、このような活動は、一見学力とは関係がないように思われがちですが、今年度の全国学力学習状況調査や、近年の大学入試において「地域の課題をどのように解決すればいいか」という問題が出題されるなど、地域と関わってきた経験が、教科書には載っていない応用力や課題解決の力になります。今後もより多くの方に関わっていただければ嬉しく思います。

桜山小学校
内薗 博之
校長先生

①学習農園で田植機の体験をする児童。②裸足で田んぼに入り昔ながらの手植え体験も。③コンバインでの収穫。鎌の使い方も学ぶ。④収穫したもち米を使っての餅つき。桜山小学校では毎年５年生が①～④の体験を行う。

培ってきた技術を子どもたちの楽しみに

若い頃から農業一筋で働いてきた山﨑巳代治さん。その経験を活かし、学校応援団では農業体験活動の支援を行っています。

桜山小学校では、米やもち米、さまざまな野菜の栽培を、枕崎小学校では150周年事業に向け記念焼酎の原料に使用するサツマイモの栽培を行っています。山﨑さんは、植え付けや収穫以外にも週に一度は野菜の様子を見に学校を訪れます。山﨑さんを見つけると、子どもたちは野菜の発育の状況や、収穫した野菜をどのように食べたかなど話しかけてくれるそうです。「楽しみにしている様子が身近に感じられるところがやりがいです」と目を細めます。

学校での活動のほか、地域では松下公民館の館長、40年以上続けているMBCふるさと特派員など、多方面で活躍されていますが、「今年度はJA南さつまの事業を活用し、市内4小学校でジャンボカボチャとハロウィンカボチャの栽培にも取り組みます！」と新たなチャレンジにも精力的です。活動の幅がどんどん広がっていく山﨑さんは「それぞれの校区に一人でも協力してくれる方がいればありがたいです」と話していました。

子どもたちから感謝をこめて

「みよじさん！やさいのそだてかたをおしえてくれて、ありがとうございました！」

今年3月、桜山小学校の教室では、まくらざき学校応援団として学校で育てる野菜の種付けから管理、収穫までを一年かけて教えてくれた山﨑さんを招き、「ありがとうをつたえる会」を開催。児童がこれまで教えてもらったことを、絵や写真、すごろくゲームなどにまとめ発表しました。野菜の知識や経験を身に付けるだけでなく、こころの成長も感じる機会になりました。